

はじめに ——— リアリテイの消尽点から

現実はどうのように形成されるのであろうか。また、現実はどうのように理解され、把握されるのであろうか。そして、その根元はどこにあり、何がわれわれを現実へ駆り立て、現実に向き合わせ、あるいは現実から目を背けさせているのであろうか。

二つの映像を思い起したい。一つは何度目かの戦争のさなか、ピンポイントを狙うミサイルがテレビに放映された映像である。宙を飛ぶそのミサイルは、虚構の世界のようでリアリティが感じられなかった。テレビゲームのほうが奇妙なほどにリアリティがあるかもしれない。しかし今では、そうした映像があったことさえこの現実から欠落してしまっているかようである。しかし、あのミサイルで攻撃され、死に至った人々の現実、今なお存在しているのである。もう一つは津波が町を飲み込み、核原子炉建屋が爆発する映像である。そのリアリティに震撼した現実、しかし今では、日々の渦動に巻き込まれて消尽してしまっただかようである。しかし今でも、あの現実が存在しているのである。

今日、世界の情勢も、身近な生活も、そして過去の歴史も、新聞や学校の教科書だけでなく、刻一

刻とテレビに、あるいはインターネットに映し出されている。それらは、受験の最中に、あるいは番組編成の中で、あるいは蜘蛛の巣(ウェブ)の中で、絡み合い入り交じってこの現実を形成している。それは爆発事故の報道番組よりもドラマの主人公の行く末にリアリティを感じるほどである。虚構の童話や小説、ノンフィクションの報道番組や新聞記事、さらには数百年前の史料からする過去の再現、それら直接は見ることでできない世界が、目で見たり肌で触れたり感覚を通してえられる像と織り合わさって、この現実を形成している。たとえ真実を食いつぶす神話や風評によってさえ、現実には形成されるのである。現実には、夢やお伽噺、虚構や仮想現実さえも食いつぶしながらわれわれを翻弄し続けている。それにもかかわらず、われわれはそうした現実の存在に気づくこともなく、現実のリアリティがこの現実それ自身から抜け落ちて無と化しているかのようである。(前著『実在と現実 リアリティの消尽点へ向けて』)。

そうであれば、われわれは現実には翻弄されながら落ち着く処もなく、現実もまた落着する処もなく、彷徨い続けるだけであろうか。現実の直中で、はたして、落ち着く処は存在するのであるか。動き続けるこの現実そのものが、どこかに落着するのであるか。

本書はリアリティの消尽点からこのような問いを出発点にしている。そして本書は現実から落着(おちつき、ラクチャク)を目指して、哲学の領域で、デイルタイとショーペンハウアーの哲学の中に入り込み(第一〜四章)、エックハルトとハイデガーの哲学に立ち寄り(第五章)、そしてショーペンハウアーに立ち返って無のリアリティへ向けて問う(第六章)。

第一章「現実の形成」では、現実の形成を蜘蛛の巣や織物のごとくに、さまざまなる人、集団、物、

出来事、さらには心の中の感情や意志、あるいは詩の世界や世界情勢など、これらが相互に作用し合う連関に求める。現実とはさまざまな連関の相互作用として形成される。〈私〉はそうした連関の織り糸が交差する地点として織物に織り込まれて形成されると同時に、現実はそのした〈私〉に現れてくるのである。そして第二章では、「現実の理解」へ向かう。現実の理解とは、人の気持ちの理解と同じように、本質的に理解不可能なものを含み、さらには誤解や理解のずれに曝されながら、現実を追形成（再現）することであり、追形成という仕方では現実を新たに形成していくことでもある。しかも追形成は、この目で見たり手で触ったりできる現実を手掛かりにして、過去の世界へ、人の心の中へ、テレビ映像の向こう側の世界へ、すなわち〈見えない現実〉へ跳躍し、それを再現する。これによって、見えない現実もこの現実には織り込まれ、この現実を形成していくのである。

したがって第三章「見えない現実」では、見えない現実への跳躍として理解の働きに含まれる類比（アナロジー）を、その跳躍力として想像力と意志を取り上げる。現実とは、この跳躍によって、見えない現実と連関づけられながら形成されるのである。そうであれば、一つのアナロジーを使って、たとえば鏡の比喩を使って、見えない現実へ跳躍しながら、この現実を見えない現実ともども鏡に映し出すことができよう。これが第四章「鏡を介して〈見る／見える〉現実」である。鏡に映し出されるのは、目は目を見ないという現実、しかし鏡を使って見る／見える現実である。そこには、見えない目の中心点が、渦動する現実の直中の静かな落着の地点として映し出される。

かくして第五章「落着」では、自身では見えない目の中心点を見定めて進む。落着はこの現実の渦動の直中でこそ自身の存在を現しうるのである。目は目で無いものに、静は動に、落着は渦動に、自

身を否定的に連関づけてこの現実を形成し、現実の連関が交差する〈私〉の直中に現れて来るのである。そうであれば、落着への道は、〈私〉が落着を求める道から方向転換して、落着がこの現実の直中で渦動への否定的連関として〈私〉の直中に現れて来る道になる。こうして問いもまた、この道筋にそって否定的連関へ、否定としての無へ向かう。これが第六章「無のリアリテイへ向けて」である。渦動するこの現実の直中であって、落着は、この現実と別の処にあるのではなく、ほかならぬ現実を形成する連関が〈私〉の直中で否定的に働いている処にこそある。それでは、〈私〉の直中で交差して〈私〉を織り上げていく現実の連関の直中で、否定としての無はリアルに息づいているのであろうか。

本書は、現実から落着を目指して進み、その道が方向転換する処で、無のリアリテイへ向けて問う。

凡例

一 引用・参照文献について。

①引用・参照文献は、巻末に文献一覧として一括掲載し、引用・参照のさいの略記号を付している。

②引用・参照文献の注記は、各章末に示している。

③デルタイとシヨーペンハウアーの著作からの引用箇所の指示は、章末ではなく、本文中に丸括弧（ ）内をもって表記している。そのさい簡便に、全集の「巻」と「頁」の表記は省略している。

例：GS22.105.（デルタイ全集二巻、一〇五頁。）

二 本文中における山括弧へゝあるいは傍点、ゝゝは、本書による名づけや強調を示す。

三 引用文中の黒点・ゝゝは、引用者による断り書きがないかぎり、引用中略を示す。

四 引用文中の傍点、ゝゝは、引用者による断り書きがないかぎり、引用者による強調を示す。原文における原著者による強調は、引用にさいして強調をせずに通常表記に直している。

五 引用文中の亀甲括弧〔 〕内は、引用者による補足説明である。

目次

はじめに	——	リアリティの消尽点から	i
凡例	v
第一章 現実の形成	1
第一節 生の連関の探求	——	自然の斉一性に対して	3
一 デイルタイの哲学へ	3
二 斉一性概念の形成(初期)	6
三 斉一性から連関へ(『序説』の時期)	10
四 連関の合目的性と連関の斉一性(『序説』から『理念』への時期)	19
五 人間本性の斉一性(『理念』の時期)	26
第二節 連関の経験	——	観念の連合に対して	28
一 経験と体験	28
二 精神科学の基礎づけ	33
三 デイルタイとヒュームの接点にして分岐点	36

四	連関の経験	40
五	連関の形成	44
六	連関の展開	47
第三節	類比による連関 —— 帰納による普遍に対して	51
一	道徳科学から精神科学へ	51
二	デイルタイとJ. S. ミルの接点にして分岐点	58
三	個から個への類比	63
第四節	現実の経験 —— 構造連関・獲得連関・作用連関	67
一	恒常的連関と個性化（『理念』の時期）	67
二	構造連関（『理念』の時期）	72
三	獲得連関と作用連関（『理念』の時期から晩年へ）	76
四	現実の経験と生の謎	80
第二章	現実の理解	91
第一節	解釈学と理解	93
一	従来のデイルタイ像に対抗して	93
二	類比・追形式としての理解	98
第二節	個から個へ、個と全体	106

一	個から個へ	——	誤解	106
二	個と全体	——	理解の限界	117
第三節	理解の対称性／非対称性			125
一	体験と理解			125
二	従来 of 解釈			130
三	理解概念の形成			136
第四節	理解のずれ			144
一	理解の連関			144
二	覚知と反省			150
三	ずれを測る基準			155
第三章	見えない現実			173
第一節	再現			175
一	詩学の領域へ			175
二	アリストテレスのミメシスからデイルタイの追形成へ			180
三	体験の追形成			186
四	体験と追体験			191
第二節	想像力による類比			196

一	詩人の想像力と追形成	196
二	超越論的図式から経験的類型へ	201
三	類型と類比	206
四	見えない現実の現前	211
五	記憶と想像力	216
六	類比	223
第三節	意志	230
一	シヨーペンハウアーへ	230
二	シヨーペンハウアーの自由意志批判	237
三	ニーチエのシヨーペンハウアー批判	248
第四節	見えない作用	256
一	意欲と意志	256
二	意志の世界	261
三	主体としての意志	265
第四章	鏡を介して〈見る／見える〉現実	281
第一節	鏡の世界	283
一	反射	283

二	方向転換	285
三	入射角／反射角	291
四	鏡を介した現実	298
第二節	鏡のこちら側、あちら側	302
一	より良き意識と経験的意識	302
二	意識の分裂	310
三	意志の現れ	316
第五章	落着	329
第一節	自由	331
一	エックハルトとハイデガーへ	331
二	自由の問題	340
三	世界と人間の繋ぎ目	350
四	自由から無へ向けて	358
第二節	無	364
一	対象の無	364
二	相対的無	370
三	意志の否定	375

四	絶対的無と限界石	379
第六章	無のリアリティへ向けて	393
第一節	無の概念規定	394
第二節	肯定の連関	401
第三節	否定の連関	404
第四節	現実と落着	408
おわりに		413
文献		i

